



2025年度博物館実習およびサテライト・ミュージアム実施報告

菊地, 真

(Citation)

海事博物館研究年報, 53:48-55

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100504885>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504885>



2025年度博物館実習およびサテライト・ミュージアム実施報告

神戸大学海事博物館専門員 菊 地 真

1. 博物館実習および授業

a) 展示見学

文学部の学芸員資格取得科目では、例年授業の一環として神戸大学の博物館施設等を見学している。文学部で後期月曜日に開講の「博物館概論」（担当、橋本寛子）、「博物館教育論」（担当、坂江渉）、「博物館資料保存論」（担当、菊地）の3授業合同で、海事博物館の展示見学会を12月15日（月）に実施した。受講生は各授業時間にあわせて博物館に集合し見学する形とした。見学者は合計25名であった。

企画展と常設展をあわせて見学し、今回の企画展「太平洋戦争時の日本商船」の普及活用を意識して、過去の戦争を展示する場合にどのような点に注意し力点をおいて展示を行うかを課題で問うた。以下に学生のアンケート回答から一部を抜粋する。

「過去にどのような経緯があったから戦争に発展したか、背景の部分に力点をおいて展示を行う。」

「自分と同じような人々が犠牲になったことを肌で感じられるように、事件や出来事についての記述だけではなく、個々人の文章や遺品に注目し、それぞれの感情に寄り添った展示を行いたい。」

「戦争の善悪や日本の功罪などといった一面的な解釈をストーリー仕立てで示すようなことはせず、反対に戦争という歴史が単純なストーリーで

は語れないことを実感してもらえるような展示にしたい。」

「戦争の生々しさも前面に出しつつ、それ以外の側面（加害や銃後の民衆といった視点）も交え、多様な視点から『戦争』の展示を行いたい。」

「できるだけ中立的な視点を持つよう心がけ、戦争の実態を表す具体的なデータや資料を用いながら、わかりやすく戦争の悲惨さや平和の大切さを伝えられるような展示を行いたいと思う。」

「展示する側が説明する文書は極力減らして、当時のことを記録した文章や写真、絵を中心に展示する。」

「全てを数として処理せず、しっかりと物語性をもたせて人々に戦争について考えてもらえるようにする。」

「来館者のほとんどが戦争の記憶を持たない人々である考慮し、『ただ見せる』のではなく、何らかのテーマとメッセージを強く発信し、一定程度の意識を共有し得る展示にする必要があると考える。」

博物館資料保存論ではほかに、「誓子と戦争」（誓子・波津女俳句俳諧文庫、山口誓子記念館）、と「戦場に行った神戸大学の学生たち」（大学文書史料室）、「江戸・上方の本屋さん」（大学附属図書館）の企画展見学を行った。

山口誓子の展示は文学関係であるため、特に俳句の短冊や句集といった紙資料の取り扱いという観点で見学している。

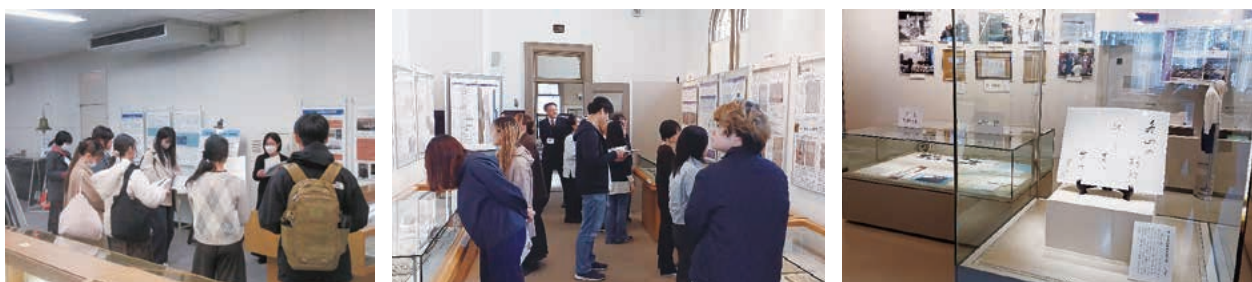


図1 展示見学の様子（海事博物館、附属社会科学系図書館）と山口誓子展の様子

大学文書史料室と山口誓子は、当館と同様に戦後80年をテーマとした。なお当館企画展の解説リーフレット（8P）を製作したのに合わせて、両者の企画展の内容も各1ページずつ紹介をして頂いた。

附属図書館は放映中のドラマに着想を得て、江戸時代の出版文化に焦点を当てる展示であった。

博物館、図書館、文書館はそれぞれ扱っている資料の種類は異なるが、収集保存し、展示などを通じて資料を世に問う活動という点で共通をしている。見学を通じてMLAの特徴を学ぶ機会としている。

b) 博物館実習B：実務実習

海事博物館では2020年度から神戸大学が行っている博物館実習のうち、博物館実習B（実務実習）と博物館実習C（館園実習）について受け入れ協力している。

博物館実習Bは理学部で行っている実習のうち2日間を海事博物館で実施し、菊地が分担協力した。日程は3月4日（水）と5日（月）である。

実務実習では収蔵庫の資料整理を行い、資料取り扱いの基礎を学んだ。海事博物館の収蔵庫を見学して資料の保管状況を学んだ後、資料を作業場所まで搬出して作業を実施した。今回は未整理であったポスター、仲島コレクションの一部の目録作成と所蔵図面類のスキャナによるデータ化を行った。



図2 博物館実習B（実務）

c) 博物館実習C：館園実習

今年度は9月に文学部から4名、甲南大学から2名の計6名、2月に文学部から2名の実習を行った。2月の実施は、9月に諸般の事情で急遽参加できなくなった学生のために再調整したもの

である。期間は9月が9月3日（水）、9月8日（月）～12日（金）の6日間、2月が18日、24日、26～27日の4日間とした。例年の通り学内機関等3か所で協力し、博物館の日常業務を一通り経験できるよう設計した。なお2月は資料修復の実習は日程上省略した。

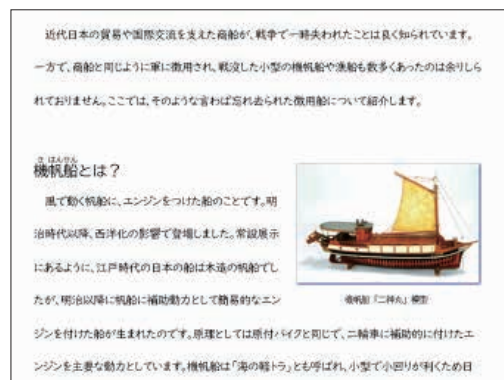


図3 博物館実習C（館園実習）
下は解説シートの一部

表1 2025年度博物館実習C日程

9/3	海事博物館
	全体説明、収蔵庫等の見学、資料整理
9/8	海事博物館、文学部
	資料整理、被災資料の修復作業
9/9	文学部
	被災資料の修復作業
9/10	文学部
	被災資料の修復作業、収蔵公文書の受け入れ作業
9/11	大学文書史料室、山口誓子記念館の開閉
	資料の受け入れ作業
9/12	海事博物館
	資料整理

海事博物館ではポスターや仲島コレクションのパンフレット類の整理を行った。ポスターは仲島コレクションとその他受入れ分の再整理に時間を要したが、今回ではほぼ終わることが出来た。パンフレット類は次年度の館外貸し出しの必要もあり、一部を整理した。また展示を見学した上で、

企画展と常設展の解説シート作成に取り組んだ。

山口誓子記念館、誓子・波津女俳句俳諧文庫では、山口誓子の旧宅を再現した日本家屋の開閉作業、文学資料の展示や保存について職員の米田氏と田中氏のご指導により学んだ。



図4 博物館実習C（館園実習）
山口誓子記念館の開館業務、施設見学

大学文書史料室はアーカイブズとして神戸大学の文書などを整理保管している。例年通りファイルのクリーニング、文書のホチキスなどの取り換え作業を行った。室長補佐の野邑氏に指導をお願いした。



図5 博物館実習C（館園実習）
大学文書史料室における公文書類の整理

また、本学ならではのプログラムとして、被災歴史資料の救出作業について学んだ。毎年起こる水害などにより文化財、特に地域や個人が保有している歴史的な諸資料の被災が増えている。本学に事務局を置く史料ネットは、古文書といった歴史資料の水損からの救出・修復技術の蓄積がある。地域連携推進室の松下氏は史料レスキューに詳しく、水損資料の吸水乾燥方法、史料の修復記録・洗浄・風乾・澆嵌め作業、真空凍結乾燥器による乾燥作業といった一連の作業を実習した。

2. トライやる・ウィーク事業の受入れ

a) 概要

兵庫県では、子供たちのさまざまな体験教育を実施しており、その一つに、「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』」事業がある。

このトライやる・ウィークは一言で言えば地域における社会体験活動であり、その目的は、「地域や自然の中で生徒の主体性を尊重した体験活動を通して豊かな感性や創造性などを自ら高めたり、豊かな自分なりの生き方を見つけたりすることができるよう支援するなど『生きる力』の育成を図る」側面にある。

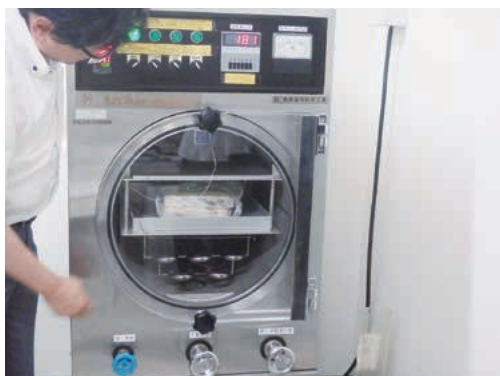


図6 博物館実習C（館園実習）
被災資料の取り扱いや古典籍の修復

具体的には5日間に渡って、小売業、福祉、サービス業、あるいは市役所や小学校、保育園など、各種事業所を中学生が訪れて業務等に参加し、体験を通じて社会生活や仕事について学び考える活動となっている。2025年度は海事博物館が位置する東灘区の中学校より受入れの打診があり、近隣の深江生活文化史料館といった類縁機関も応じてきていることを念頭に承諾することとした。

神戸大学では高大連携や地域連携に取り組んでいる。地元神戸市の中学生を対象とした「トライやる・ウィーク」も、地域そして将来の大学や博物館といった場での学びや職業への関心と理解を高める効果が期待されよう。神戸大学の各部局・組織や研究室単位では過去にも実績があるが、海事博物館としての受入れは今回が初となった。

期間は2025年11月10日（月）～14日（金）の5日間で、神戸市立住吉中学校（東灘区）の2年生、2名である。なお途中12日（水）のみ、他事業所で体験をしている2名が都合により1日だけ海事博物館の作業に参加した。担当は専門員の菊地である。開館日において適宜、博物館スタッフの補佐を得た。



図7 トライやる・ウィークのポスター

b) 実施内容

今回は博物館の活動全体を理解しながら、博物館の具体的な日常作業を一緒に行う形とした。

1日目は文学部にてガイダンスの後、附属図書館、百年記念館の展示見学を行った。さらに菊地担当の博物館学の講義を聴講して、MLAという社会教育・資料保存機関の役割を学んだ。午後は大学の文書整理を実際に行い、年代ごとに仕分ける作業を行った。2日目は海事博物館で展示室の展示ケースの清掃を行い、常設展示を見学した。次いで、整理済みの資料（商船会社ポスター）を収蔵庫の棚にしまう作業を行った。また当日、一部の展示入れ替え作業を行っていたため、この資料展示の作業も手伝ってもらった。

3日目は4人であった。展示ケースの掃除とポスターの収納作業を継続した。午後は顧問と特別専門員の案内で企画展を見学し、さらにロープワーク体験を行った。見学や体験は特に熱心で、ロープの結び方に苦戦しつつも取り組んでいた。

4日目は、ポスターの収納、収蔵庫内での引き札・古典籍の配置換え作業を主に行った。また途中、資料の梱包や保護に使う綿布団の制作に取り組んだ。呑み込みが早く、上手に綿布団を仕上げていた。5日目はポスターの収納作業を行い、翌週に予定されていた当館市民セミナーの配布資料作りを行った。



図8 トライやる・ウィークでの活動
(順に掃除、収納、見学、体験)

全体としては、清掃や資料の収納作業といった、比較的容易だが裏方として欠かせない業務を体験してもらった。とは言え、中学生の体験であり、作業を主としつつ、間に展示見学やワークショップの体験を挟んで博物館の色々な側面を知れるように考慮した。

3. サテライト・ミュージアムの活動

a) 巡回展

MLAK 連携の事業として例年、サテライト・ミュージアムを実施している。2025年度に行われた展示などは以下のとおりである。

誓子・波津女俳句俳諧文庫と山口誓子記念館は、特別展「誓子と戦争」を9月8日(月)～10

月17日(金)に開催した。山口誓子は戦場に赴かなかったが、戦争を題材とした俳句を詠んで公表しており、多くの文学者と同様、作品を通じて戦争協力をしていた。また妻・波津女の弟、末永山彦は学徒兵として召集されて国内で任務についており、義弟の出征を案じる句も残している。12月からは常設展として再構成し展示している。

大学文書史料室は企画展「戦場に行った神戸大学の学生たちー戦後80年ー」を10月23日(木)～12月6日(土)に開催し、学徒出陣によりペンを銃に持ち替え兵士として戦場に行った神戸大学の学生たちの諸相について、貴重な歴史資料や写真などで振り返った。巡回展は海事博物館会場が2026年1月19日(月)～2月13日(金)、社会科



図9 神大の展示チラシ
(左上からサテライト・ミュージアム、海事博物館企画展、附属図書館資料展、大学文書史料室企画展、山口誓子特別展)



図10 山口誓子展「誓子と戦争」

学系図書館会場は2月5日（木）～3月17日（火）、移転後の神戸大学東京六甲クラブ（東京都千代田区有楽町電気ビル南館地下1階）で2025年12月23日（火）～2026年1月26日（月）に開催した。

神戸大学附属図書館は資料展「江戸・上方の本屋さん」を10月21日（火）～12月22日（月）に実施した。江戸時代には木版印刷が活発となり、江戸や京都、大坂を代表する本屋と出版した本を豊富な所蔵資料のなかから紹介した。

海事博物館は巡回展を1月23日～4月9日（百年記念館）、4月27日～6月5日（附属図書館・社系）の予定で開催している。戦没船絵画の複製4点のほか、解説パネル、大久保一郎や神戸高等商船学校の資料を数点ずつ展示している。来場者は比較的多いと聞いている。



図11 「戦場に行った神戸大学の学生たち―戦後80年―」
大学文書史料室の巡回展示



図12 海事博物館巡回展（百年記念館）

b) 附属図書館との連携

今年度も人文科学図書館において附属図書館職員の方々にご協力頂き、展示期間に併せて関連する図書紹介を行った。

今年は戦争に関する展示であったため、テーマ

を「戦争と文学、学生のまなざし」と設定し、文学や芸術といった文化的な創作活動が戦争とどう関わり、戦争の影響を受けてきたのかを主題とした。あわせて、太平洋戦争や海軍、強制収容、ヒロシマなど、第二次世界大戦の時期の日本の状況を知り得る図書も選定した。



図13 附属人文科学図書館における図書テーマ展示

c) その他関連事業

神戸大学文学部地理学教室では2024年から、阪神・淡路大震災から30年となる兵庫県で震災の経験を記録するプロジェクトに取り組んできた。特に震災によるアスベスト被害の経験を記録し、伝える活動を継続的に行っている。

アスベストに関しては近年、震災後の建物解体に従事した労働者の発症が確認され、埃が舞い、復旧する町にいたボランティアや住民までもが被災しうるとして再認識されている。アスベストによる中皮腫等の病は潜伏期間が長いことが特徴で、患者は今後増えると予測される。

地理学教室では1年間に渡って継続的に聞き取り調査を行い、被害の実態を明らかにしてきた。2025年にこの間の調査結果を整理して報告会とパネル展示を計画し、文学部A棟のエントランスホールにて7月20日～8月7日に展示会を開催した。学期末からオープンキャンパスまでの期間、

多くの在学生や来学者の目に留めて頂けたと考えている。

中心となっているのは地理学部の原口剛教授であり、菊地は展示準備の一部を補佐した。調査は2025年も継続中であり、引き続き定期的にパネル展示会などを開催し、この問題の普及啓発に役立ててゆきたい。

以下に、展示の主旨文を採録する。

「2025年1月17日に阪神・淡路大震災から30年の節目をむかえ、31年目に入りました。一般に「災害の記憶」は30年を境に風化の危機にさらされるといわれます。しかし、阪神・淡路大震災にともなうアスベストばく露による関連疾患は、潜伏期間の長さゆえに、むしろこれから発症する可能性が高まります。その意味で、今後も問い続けなければなりません。

神戸大学文学部では、「震災の経験を記録する」という課題を掲げ、震災30年の節目に向けた調査活動を実施してきました。私たちはアスベスト被害に苦しめられてきた当事者の方々、そのたたかいや生活を支えてきた支援者の方々など、さまざまな立場の方の協力を得て、お話をおうかがいしました。しかし、私たちの活動は「震災30年」でゴールを迎えたわけではありません。調査活動のなかで私たちは、記録すべき声はまだたくさん残されていることを、痛感しています。なにより、震災やアスベスト被害の経験を次の世代へと語り継ぐという課題はこれから重くなっていくと確信しています。

そのような問題意識のもと、私たちは、「震災の経験を記録する」ための31年目のプロジェクトに取り組むことにしました。その第一歩として、本企画では震災30年に向けた調査に携わった学生たちの言葉で、後輩たちに震災によるアスベスト被害の経験を伝えることを目的としたパネル展示を実施します。本パネル展示は、2024年6月23日に実施した公開講座にてお話しいただいた内容を軸として、震災にともなうアスベスト被害の現実を再構成することを試みます。

本展示はこれまで調査に携わってきた学生たちの到達点であると同時に、新しく調査に踏み出す学生たちのスタート地点でもあります。私たちは、震災に伴うアスベスト被害の経験を聞き取り記録するプロジェクトを再スタートするつもりで



図14 阪神・淡路大震災とアスベスト被害プロジェクトの展示ポスター、展示パネル（一部）、エントランスでの展示風景

す。」（主催：神戸大学人文学研究科地理学教室・倫理創成プロジェクト）

最後に、本年度もご協力頂いた関係各位に心から御礼申し上げます。

協力：一般社団法人海洋会、神戸大学附属図書館、大学文書史料室、山口誓子記念館、誓子・波津女排句俳諧文庫、神戸市立住吉中学校、野邑理栄子、松下正和、米田恵子、田中史恵、多田真紀子、橋本寛子、坂江渉、原口剛、畑匡洋（敬称略）